まびらかなることは、成島道筑信遍に仰せて、山上にたてられし碑文に記せり、此碑石もかねて熊野山の石を引て吹上の御庭におかれしを用らる、さて此神の傳をも信遍につくらしめらる、又山の麓に瀧野川といへる、左右の岸に棣棠をあまた植、山上には櫻に交へて松數十株をうゑしめ、山より西の田づらには菜をつくらしめられしかば、櫻の咲ころ木間よりのぞめば、菜の花こがねをまきたるやうに見えて、其景色いはむ方なし、これ府内近きほとりに、名勝を開き玉ふべしとの御事とぞ、一説に享保のはじめまでは、毎春花の時、貴賤みな寛永寺にまゐり遊興せしほどに、まく打まはし酒くみて、らうがはしかりければ、祖廟近きほとりにて、もしや猥りなる擧動あらん恐れなきにあらず、是府内に遊樂の地乏しきゆゑなりとて、飛鳥山も開かれしに、諸人それよりこゝにつどひあつまり、寛永寺はありしに比すれば、大にものさびしかになりぬ、

〔江戸名所圖會十一〕金井橋　多磨川の上水堀兩岸の芝塘にあり、金井村に架す、故に名とす、小川源村より新橋の東北千川上水の掛口の所まで凡一里あまり、兩岸ことごとく櫻にして、左右の兩岸九村に跨る、また架す所の橋大小七ケ所あり、何れも其地名によりて唱ふ、いはゆる金井橋の類なり、此上水流西の方羽村より北に播れて江戸に至るまで、直流凡十里あり、是を玉川上水と號す、承應の頃始て此水流を大江戸に引給ふといへり、此地の櫻は、享保年間或云元文二年丁巳郡官川崎某、台命を奉じ、和州吉野山および常州櫻川等の地より櫻の苗を殖らるゝ所にして、其數凡一萬餘株ありしとぞ、今存する所の古木一圍にあまるものまゝあり、延享の頃までは、年々に官府よりこれを殖つがせ給ひしとなり、今は其數大に減て凡三百株あまりあり、立春より五十四五日目の頃開初て、六十日目を滿開の期とす、七十日目の頃に至りては落花す、最其年の寒暖によりて少しの遲速はありといへども、大方は違はず、就中金井橋の邊は佳境にして、爛熳たる盛には兩岸の櫻、玉川の流れを夾んで、一目千里實に前後盡る際をしらず、こゝに遊べばさながら白雲の中にあるが如く、蓬壺の仙臺に至るかとあやしまる、最奇觀たる故に、近年都下の騷人韻士遠を厭はずしてこゝに來り遊賞す、

〔伊豫古蹟志四周布郡〕千原邑夾レ岸有二櫻樹一、其中無二雜樹一、名曰二矢野櫻一、或曰二櫻三里一、斯地巖峭嶺稠土性疎惡、故峯嵘爲レ雨善崩毀也、郡尹矢野五郎右衞門曰、櫻柢能盤滋焉、貞享四年命植二八千二百四十株一、路